



講師の渡部泰山氏

## 第33回 金山町「家庭の日」運動推進大会・金山町自殺対策緊急強化事業講演会

# 命の輝きを見つめて

山形県教育庁 教育次長 渡部泰山氏

次代を担う子どもたちの成長に直接影響を持つ家庭・地域のあり方をみんなで考え、つくっていかうと女性団体が主催している「家庭の日」運動推進大会。12月6日、中央公民館で開かれた33回目の今回は、町が今年度から3年間にわたって取り組んでいく自殺対策緊急強化事業と併せて行われました。全国で毎年3万人以上が自らの命を絶っており、深刻な社会問題になっています。かけがいのない大切なところとこのため、私たちは何をしなければならぬのでしょうか。

山形の渡邊理香さんという、平成8年、当時小学校1年のお嬢様を交通事故で亡くされた方のお話を聞きました。現在は家族を交通事故で失った方々の心のケアをする交通事故・不慮の事故の遺族の会の代表をしています。彼女は事故を事実として受け止めることができずに、何度も自分が死ぬことを考えたそうです。1年、2年過ぎていっても自分の生きる目当てを一つも見いだすことができなかった。そして、死を受け止める感覚が変わったと言っています。自分が死んだらこの娘に会えるかと考えると、悲しみや苦しみから解放されて逆に楽になれる。死ぬことへの恐れが彼女の中から消えてしまった。非常に複雑な気持ちだと思います。

ところがやがて、自ら命を絶つことは、生きたくても生きられなかった娘に申しわけないということに至ったと言います。これからの残りある命を恥ずかしくないように生きなければならなかったと。しかし苦しみや悲しみは消えることはない。身近な人、愛する人を亡くするというのは、それほど切実で大変なことなのです。

私の父が重い病気を患って82歳で亡くなって8年たちます。余命3ヶ月という時に、自宅に連れて来て家族全員で介護しました。看護師さんたちが父

日本の代表的な現代詩人、川崎洋さんが娘さんから、立て続けに両親を亡くした親友のために詩を作ったほしいという手紙をもらい、悩んだ末に書いたそうです。  
《一日を我慢して 二日目を我慢してください》  
そして三日目も我慢してください  
そうすれば 一日 一ヶ月 一年  
五年の歳月になり  
その時あなたは  
きっと今とは違う》

祈るような気持ちで書いた、ただ一人の少女のための詩。私たち一人ひとりが、いざ何かの時にたった一人のために、心も魂も思いも伝えて、命がけであなたが必要だということを感じ、そしてあなたの存在があることで私たちが今あるという事を呼びかけてきたらどうかと考えさせられました。毎年3万人を超す自殺者は、その人のために眼差しをもって捧げる人がもしそばにいたら、その死を止めることもできたのではないかと。ごく普通の日常の中で、その人のことをありったけ見つめてあげられるようなあなたかな社会、人間関係、家族あるいは親友関係を、私たちはこの金山町から取り戻していく必要があるのではないのでしょうか。

渡邊理香さんは、「たった一人のあなたへ」という言葉を綴っております。

の遺体を拭く時、2人の私の娘が懸命に体の隅々まで祖父を拭いてあげたというのを、後から聞き、娘たちは、祖父の死をどのように受け止めたのか、人のかけがえのない命というものを考えさせられました。

その後、朝、昼、晩、父親が生きていた時と全く同じリズムで生活をしていく私の母親の姿を見ていると、亡くなった父親をうらやましいと思ってしまう。8年もたっても、彼女の中では夫は常に生きているんです。人間って多分そういうものじゃないですか。人は死してもなお、その人の心の中で永遠に生き続ける。それが人間の命なのであり、生きている人間も死者によって支えられていると思えました。

ましてや、自ら命を絶たなければならなかった人の命と残された人々の心の痛みというのを考えると、人の命をどのように受け止めていけばいいのか。苦しんで、悩んで、今まさに命を落とそうとする人に、私たちが何をすれば、どんな眼差しをかけてやればいいのか。しょうか。「私は、この世界に本当に必要なんだ。かけがいのないひとりなんだ。」と自覚させ、自ら命を絶つなんていうことを避けていける関係を、この地域のコミュニティの中で作っていかねばならないと思っています。

### 《前略》

どうしてあの子が  
急にいなくなってしまったんでしょう。  
どうしてあの子だったのでしょうか。  
「守ってあげられなくてごめんね。」  
もう二度と笑うことのない冷たい頬を、何度も何度も撫でました。  
できることならもう一度抱きしめて  
大好きだと伝えたい、もう一度髪を  
結んであげたいのです。

もう一度声を聞かせてください、神様。  
今、私が何をしたら、あの子が喜んでくれるのかを考えています。  
「お母さんがんばったね。」  
と喋ってほしいから。

毎日あたりまえに会える家族を失ってわかる、あたりまえの幸せ。  
あなたがそばにいて、ことごとくうれい人がいて、あなたが生きていて、  
勇気が出る人がそばにいます。  
あなたは、何ものにもかえられない宝物。

だって、この世でたった一人しかない  
ない「あなた」なんですもの。《  
いったい人間の幸いとは何か。必要とされている、今ここで輝くものがある、そういう関係性とか人と人とを直接結びつける地域社会、これから町の行政も、教育という仕事も商工業や農業、林業を営んでいる人も、そういう中における「生活の哲学」というものを、

改めて考えていく必要があるのではないかと感じました。

詩人・金子みすゞさんが「わたしと小鳥と鈴と」という詩を書いていました。  
《私が、両手を広げて》  
お空はちっとも飛べないが  
飛べる鳥は わたしのように地べたを早く走れない

わたしが体をゆすっても  
きれいな音は出ないけれど  
あの鳴る鈴はわたしのようによく  
たくさんの歌は知らないよ  
鈴と小鳥と それからわたし  
みんな違って みんないい》  
その人の持っている素晴らしさに気づき、共感し合い、大切にしようというみんな違ったたった一つの命の役割がある、みんな違った必要とされるものが人間にはあるのだと思います。

何億分の一で生まれた私たちの命。それをお互いに支え合い、理解し合い、素晴らしい部分を認め共感しあって、少々貧しくてもどうか生きがいを持って、命と向き合っていて、残された自分の時間、命を一緒に生きてみましよう。どうかみんなでの最上を支えて、少女貧しくても輝いていけるものをさがしていきましようよ。

(講演の内容を要約させていただきました。)

